九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

神戸市立博物館蔵、有志筑忠雄序「万国管闚」について

大島，明秀
熊本県立大学文学部

https://hdl.handle.net/2324/2334002

出版情報：熊本県立大学国文研究. 64, pp.51-68, 2019-07. 熊本県立大学日本語日本文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

国文研究　第六十四号　（２０１９・７）

神戸市立博物館蔵、有志筑忠雄序「万国管闚」について

大島明秀

熊本県立大学日本語日本文学会

神戸市立博物館蔵、有志筑忠雄序「万国管闚」について

大島明秀

はじめに

志筑忠雄の最初期の仕事である「万国管闚」（一七八二序）については、各地に一五点の写本を発掘し、その内容構成を校合した結果、諸本の中で唯一志筑忠雄序を前付に有する現長崎歴史文化博物館蔵本（旧長崎県立図書館蔵、以下長崎本）が、志筑の著した原型を備えた本であると結論づけた[1]。

ところが、脱稿後新たに志筑序を前付に有した神戸市立博物館蔵本（以下神博本）を発見したことで、長崎本の位置づけについて再確認を迫られる事態となった。よって本稿では、神博本の内容構成を確認しながら長崎本との比較を行い、両者の位置関係を比定しつつ「万国管闚」の原型について改めて検討する。

一、書誌

既に諸本一五点の書誌については明らかにしたので、これに基づいて神博本を第一六番目に配置し、法量、形態、紙数、表記、外題、内題、志筑序文の有無（年記）、奥書の有無の順に記載し、その他書写・蔵書に係る識語、蔵書印記、貼紙、備考は認められる場合のみ記し、引用部分は底本の表記をできるだけ反映させた。ただし、現所蔵機関に係る蔵書印や貼紙は採録しなかった。なお、比較のために長崎本の書誌を再掲した。

16、神戸市立博物館
法量：二三・七×一六・六糎
形態：写本、一冊、上下二巻
紙数：六二丁
表記：漢字カタカナ交じり文

外題：なし
内題：萬國管闚
志筑序文（年記）：「天明二壬寅之仲秋／肥前国長崎晩生志筑忠次郎盈長叙」
奥書：なし
識語：「五」
蔵書印記：「秋岡圖書」（朱・陽）
：「はるあきはなのいほ」（朱・陽）
：「養浩隄[?]餘蠹府之章」（朱・陽）[2]
備考：秋岡武次郎コレクション
：序文と本文では手が異なるか

（1、長崎歴史文化博物館）
法量：二七・二×二〇・七糎
形態：写本、一冊、上下二巻（七巻仕立てであることを示す表記も併記）
紙数：五九丁
表記：漢字カタカナ交じり文
外題：萬國管闚
内題：萬國管闚
志筑序文（年記）：「天明二壬寅之仲秋／肥前長崎晩生志筑忠次郎盈長叙」
奥書：なし
蔵書印記：「風中書屋」（朱・陽）
：不明陽刻朱印一顆
備考：渡辺庫輔（風中書屋）旧蔵本
：用紙は裏紙を使用
：上巻冒頭に「巻之一　雑志上」とあり、途中「雑志二」とあるが巻数表示はなく、下冊「西域志」に「巻七」とあり
：項目227の大半欠落
：自筆本との推測あり[3]

書誌を見る限り、長崎本と神博本の構成や内容に係る最大の異同は巻数表示に認められる。長崎本は上下二巻でありながら構成が七巻仕立てであることを示す記述も併記されている一方、神博本は上下二巻であることが示されるのみである。次に小さな差異ではあるが、序文年記において、志筑の居住地が長崎本では「肥前」とあるものの、神博本では「肥前国」と「国」が付け加えられている。なお、後付で志筑序を備えている岡山大学附属図書館本（以下岡大本）と横浜市立大学学術情報センターA本（以下横市大A本）では、長崎本と同じく「肥前」のみの記載である。

二、神博本の内容構成と位置づけ

（一）序文

長崎本と神博本の内容比較にあたって、はじめに両者に付された序文を比較してみよう。以下。拙稿で提示した長崎本の校訂版序文[4]、ついで神博本の序文を掲げ、その差異を示す。なお、神博本の引用にあたっては、旧字は常用漢字に改め、また、読点や改行の位置を長崎本序文のそれに合わせ、異同が認められる箇所については傍線を付した。

【長崎本（校訂版）】

序

伝不云乎、天地始初混沌未分時、想只有水火二者、水之滓脚便成地、今登高而望、群山皆為波浪之状、便□（是）□（水）泛如此、不知因甚麼時凝了、初間極軟、後来方凝得硬、亦云水之極濁便成地、火之極清便成風霆雷電日日星之属、蓋欲知天学之模範、則須就天学家而学之、且夫地球之広大中、雖其国名不可得聞、而古昔欧羅巴人事交易、欲為其国家得利、而海槎之所通無所不回視、而測定其地之度極、著地球之図、世人雖知之未知其界内諸国之義者、然如海外諸邦人物草木禽獣其知者□（夫）豈不知之、予継紅毛訳家之業、有暇則閲見紅毛之書、随見之□□□、□□（而訳之）□□（随訳）而記之、弟恨聞見□（未）博、□□（理又）陋而遺漏者□（尚）多、誤訳亦不少、後之学広聞多之君子、改而正之則幸甚

天明二壬寅之仲秋

肥前長崎晩生志筑忠次郎盈長叙[5]

【神博本】

序

伝不云乎、天地始混沌未分時、想只有水火二者、水之滓脚便成地、今登高而望、群山皆為波浪之状、便是水泛如此、不知因甚麼時凝了、初間極軟、後来方凝得硬、亦云水之極濁便成地、火之極清便成風霆雷電日星之属、蓋欲知天学之模範、則須就天学宗而学之、且夫地球之広大中、雖其国名不可得聞、而古昔欧羅巴人事交易、欲為其国家得利、而海槎之所通無所不回視、而測定其地之度極、著地球之図、世人雖知之未知其界内諸国之義者、然如海外諸邦人物草木禽獣其知者夫豈不知之、予継紅毛訳家之業、有暇則閲見紅夷之書、随見論之、随訳而記之、弟恨聞見未博、文理亦随而遺漏者尚多、誤訳亦不少、後之学広聞多之君子、改而正之則幸甚

天明二壬寅之仲秋

肥前国長崎晩生志筑忠次郎盈長叙

数箇所に確認できた異同のうち、長崎本の「始初」、「日日星」、「紅毛之書、随見之□□(而訳)」、「肥前」と記されているところが、神博本では「始」、「日星」、「紅夷之書、随見論之」、「肥前国」とあるのは、典拠とした文章や筆者の簡単な誤記、あるいは表現の差異といった記述上の問題と考えられ、そこに深刻な意味上の違いは考えにくい。

むしろ問題なのは、長崎本で「天学家」とある部分が、神博本では「天学宗」と記述され、理解できない言葉になっていることである。さらには、序文末尾で著者が自らの浅学と著作の不十分さに対して後学の訂正を請う部分で、長崎本では自身（の著作）を謙遜して「□□(理又)陋」と「理の見識が狭い」と述べているが、神博本における同箇所は「文理亦随」とあり、文脈に沿わず、およそ意味が通らない表現になっている。

このように長崎本に比べ、神博本では全体の文脈から外れる文言が二箇所に存在することから、少なくとも序文に関しては前者の方が原型に距離が近いものと見てよい。なお、岡大本ならびに横市大A本においても、神博本に認められた異同は確認できない。

（二）神博本の内容構成と位置づけ

ア、形態

志筑序文を備えた四本のうち、既述したように長崎本は上下二巻でありながら七巻仕立てであることも表示され、二重に巻数が示されている唯一の本である。他方、志筑序文を後付で有する「乾坤」二巻の岡大本および横市大A本はともに司馬江漢本に遡る写本であり、諸本で最終項目となっている項目227より後に、その他の本でそれ以前に配置されている項目が多数収録されている。

神博本は上下二巻本のみの表示であり、序文は前付で、他三本には無い記述の異同が認められる。また、司馬江漢の奥書を備えておらず、さらに本文は大半の諸本と同様に項目227で終えられている。よって、神博本の転写系統が岡大本および横市大A本のそれとは異にすることは明らかである。

イ、項目の有無と配列

次に、神博本の内容構成を確認していくために、全二二七に及ぶ長崎本の内容項目の一覧を掲げる（表1）。

表１　長崎歴史文化博物館蔵「万国管闚」の全項目

（前掲拙稿「志筑忠雄「万国管闚」の文献学的研究」掲載表を再掲）

上巻	
巻之一　雑志上	
1	天学名目鈔による渾地の周囲
2	地周１度の距離の東西比較
3	西洋１里の距離
4	五大州の位置説明
5	地中海および紅海
6	ヨーロッパ（欧羅巴）諸国は耶蘇教を信じ、トルコ（テユルク）王及びアフリカ（利未亜）諸候はモール教を信ず
7	インド（天竺）諸国、ブッダ（浮屠）を信ず
8	ヨーロッパの中でロシヤ、ドイツ、トルコ（テユルク）は三大王あり
9	温帯（暖帯）と東風
10	天明２年は西暦 1782 年
11	日本では（吾）喪服に白きを用ゆ、ヨーロッパ（彼）は黒を用ゆ
12	ヨーロッパ諸国と国民の性質
13	上ドイツと下ドイツ
14	西洋の爵位
15	イギリス（諳厄利亜国）人航海術を善くす
16	オランダ（阿蘭陀）語は下ドイツ言葉なり
17	西洋暦法
18	耶蘇教の祖キリスト（キリステス）とゴット
19	ムハンマド（マホメツト）とムガール国（莫臥爾国、モーレン）
20	アフリカ（利未亜）の内のムガール国
21	インド（印度）、中国、日本の蘭名
22	蝦夷は日本人を呼んでシャモと云う
23	ペルシャ（波斯）国、リハ国を滅ぼし、牛を尊ぶ風習（アピス）を廃す
24	仏はリハ国より難をさけてインドに来て法を説いたか
25	リハ国の位置、一名エジプト国
26	スマトラ（蘇門答剌）と冬至夏至時の太陽の位置
27	南アメリカ（亜墨利加）のパラマ南回帰線に当る
28	北方グリーンランド（グルーンラント）の風土
29	北極と南極

30	赤道下の国は四季を通じて昼夜等しい
31	春分・秋分時は昼夜の長さ等しい
32	緯度・経度と昼夜の長さの関係
33	磁石の指北性
雑志二	
34	七国一致のドイツ国
35	福音書（エウアンケリユム）とコーラン、仏教とキリスト教の性質比較
36	インド（印度）海の一身八頭の水族
37	ヨーロッパ山中に2丈の長さの蜥蜴様の物を見る
38	西洋七芸
39	三災は疫兵饑、三危礁は奕女酒なり
40	長崎・アムステルダム間の時差
41	オランダ国府と長崎の緯度・経度
42	インド中の竜
43	タバコ（煙草）の語源
44	地中海の大きさとその周辺国
45	黒海の位置とその名の由来、トルコおよびコンスタンチノープル（コンスタンチノホール）について
46	地球は正円ならずして橙実に似たり
47	南北に向けて行くものはその極に至る
48	アジア（亜細亜）海中の甲蟲は満月に脳滅す、人、水中に死すれば男は俯して女は仰く、欧羅巴はこれに相反す
49	南アメリカのラ・プラタ（フラタ）河辺の塩と海中の動物
50	形、人の如くにしてもの言わざる異物
51	狒々、人の婦人を奪うものあり
52	海中の海老の如き尾をもつ人
53	世界七不思議（七奇）
54	駝鳥と食火鳥
55	犀と象の闘い
56	象とワニ（蛟）の闘い
57	ムガール国のワニとその象の襲い方
58	ローマの闘技場
59	大型の猟犬（獒、ヲヽイヌ）よく獅子・象を制するあり
60	西域の樹、枝分かれして密生し家屋の如くになり、軍中の陣所とすることもあり
61	ヨーロッパ海中、小魚の為に船進まぬ事あり

62	タコを載て海中を帆の如く行く尺に満たぬものあり
63	南米ラ・プラタ河中の魚アッケリュス（アツケリユス）と河辺の風俗
64	モール教、耶蘇教、仏法3教間相互の評価
65	人魚について
66	長崎の麝香鼠、和漢紅夷の書に見えず
67	コロコテイル、一名カイマン（鼉）について
68	海豚（トルヘイン、仁魚）について
69	剣魚（スワールトヒス）の嘴が鋸に似ていることとその字義
70	ハイエナ（ヘイナ）とサラマンダー（サラマンドル）
71	極楽鳥（ハラテイルホーゴル）について
72	天竺の羊に似た獣は腹中でヘイサラバサラ（鮓答、ヘーサルバサル）を生ず
72	カイマン（鼉竜）の皮硬し
74	犬は媚る時尾を振り、獅子は怒る時尾を振る
75	獅子は尾の末に刺あり
76	獅子の子育て
77	獅子は鶏と火を恐れ、畏れ伏する人を襲わず
78	主人に忠実な獅子の逸話
79	パンテルおよびレヲパルトは獅子の類なり
80	北米の豚と珍しい草（イルハヒ）
81	アジア人は米を、ヨーロッパ人は小麦をもって常食とす
82	西周りにインドに至ると1日の差を生ず
83	ヨーロッパの霊鳥ホーニッキについて
84	インド中の一大鳥キリフーンについて
85	ペリカンについて
86	スピッツベルゲン島（北方尖山、スヒツヘルケ）の鴻鴈の類
87	インドのマダカスアルの大羊について
88	アラビヤの羊の尾長大にして小車を率かしむ
89	フランス（拂郎斯国）、ポルトガル（蒲麗都家国）、スペイン（イスハニヤ）の日本と比較した大きさ
90	イギリスは日本より少し大なる島国、イタリヤは日本の半分
91	仏・独・伊相互の位置関係
92	日本の東南大洋中にある数多の小島と島人の特徴
93	南米西南海における1600年頃の見聞
94	磁石の両極と相互の吸引反発現象
95	テネリハ島に天下第一の高山あり

96	ある魚（カベリヤウ）中に微小虫あり、顕微鏡にて認められる
97	山の如き海中の巨魚
98	形、猫に似た異獣（ロイアール、懶人）
99	カメレオンの性質
100	インドの 330 才になる長寿の人
101	アミヤントステーンという石あり、織りて火に投げるとさらに清白となる
102	ドイツ 26 文字を用ゆ
103	アメリカの喰人国
104	アメリカ東海の海獅子とその性質
105	インド近国に半人半獣の人あり
106	カスピ海辺に生ず羊に似た草木（羅名アクニユスセイテカ、蘭名フリユクトデイル）
107	ヘイサラバサラを出すペルシャの獣とミイラ
108	バルサム（バルセム、バルカン）とその産地
109	カスピ海中の魚、触れると手足麻痺す
110	カスピ海中の水苦し
111	ペルシャの樹脂
112	燕窩についてのケンフルの問答
113	ペルシャ国の位置
114	小獣よくカイマンを制するものあり
115	カムチャッカ（カムシカツト）の位置と風俗
116	蝦夷の東に海あり
117	南部より松前へ渡る所の船、潮に流さる
118	日本の東方および東南の方は皆アメリカの地なり
119	薩摩・琉球・呂宋・爪哇島まで島々絶えず
120	オランダ人の説に日本・モンゴル（韃靼）・イギリス・アフリカのアビシャ（アヒシヤ）国の人、武に強しとあり
121	日本の北国より阿片とオクリカンキリ（ヲクリカンキリ）を製す所あるというが、ありや否や
122	蝦夷は仏法を知らず、又唇に入墨をす、馬の如き獣は毛長くして走ること飛ぶが如し
123	ヨーロッパのカレイの如き魚（タルホツト）について
124	イタリヤの毒グモ（タランテユラ）について
125	ブレスケン号難波のこと
126	ブレスケン号難波と志筑孫兵衛の活躍
127	蘭人の 1599 年南米海中の島々探険時の見聞

128	ヨーロッパにオットセイ（膃肭獣）多く、その腎は薬となる
129	大象、太陽の出る方に向い跪く
130	ダス、エーラント、レヲパルト、カメレヲパルト、スレーホツク、ミユルムルデール、それぞれの動物の形状と性質
131	コゲコルレという小虫の形状と性質
132	没食子について
133	オランダ人（紅夷）は狐に怪あるとは言わず、日本の狐のみ怪あるか
134	狸はダスでもヤツカルスでもなし
135	ブドウ酒の製法
136	獣の腹中より出る痩石（ベソアルステーン）の種々の例とその考案
137	蟹の腹中より出る石（ヲクリカンキリ）について
138	ウニカールについて
139	シユフリマートの製法
140	ペレシピタートの製法
141	珈琲（コッヒー）について
142	ポルトガルの植物油
143	樹脂からとる油（テレビンテイン）
144	石鹸（サポン、一名セープ）の製法
145	テリアカ（テリヤーカ）の製法
146	一角（ウニカール）についての諸説
147	サフラン（サフラーン）の形状と特徴
148	蛇石（スランガステーン）
149	オランダの猿は尾長く、鹿は甚だ大なり、ペルシャの馬は極めて大なり
150	オランダの瑪瑙（アガートテート）の模様
151	ヤギ（野牛）の血に硝子を入れれば忽ち飴の如くになる
152	硝酸（ステルキワートル、猛水）の製法、性質、保管法
下巻	
雑録下	
南亜墨利加志	
153	ラ・プラタ河の辺のハイシヤという地にある川の大蛇
154	ハイシヤ川から30里離れた乾燥地帯カルコラスト
155	カルコラスト東海の海鰌
156	西洋人、南米探険にて掠奪す
157	西洋人は利を第一とし、次に耶蘇教、命は最軽とす
158	ヨーロッパの田吏野人もアメリカの皇都の文官となるべし

159	アメリカ内にある長人国（大人国）について
160	インド内にある小人国
161	マツカレスは草木繁き地にして蜂蜜極めて上品なり
162	カリヨスという土地の風俗
163	南米に西洋の属国極めて多し
164	南米東海の大魚
165	南米海中の猛魚、相闘う時は必ず大風雨生ず
166	カランテースは乾燥地にして、原住民は樹木の根の汁を取りて渇き免る
167	エペリースおよびバッカセイの人の風俗
168	シケルヒスの風俗
169	飛魚（フリーゲンテヒス）について
170	マイカエスでは羊をもって牛馬の用に代う
171	ある一群国の兵士の装束
北亜墨利加志	
172	メキシコの祭礼の儀式
173	メキシコ諸神の像多し
174	メキシコの葬送の儀式
175	クワクサカ国の位置と産物
176	メキシコの婚姻制度と１年の長さ
177	猟神を祭ること、人身御供、メキシコ人の風俗、諸悪獣、医業を兼務する法師、鬼神（デモン）のこと
178	メキシコ国クシロペツキの飛泉
179	エカルクワ国の婦人は夫より強し、犠牲の法、道に迷った西洋人 400 人を食い尽くす
地中海辺志	
180	紅海周辺の産畜人（バダヨウルス）の風俗
181	エジプト国の位置と気候
182	エジプト、エチオピア（エチヨペ）両国とナイル河
183	トルコのシュルタン（シユルタン）、ロードス（ローテス）島の大像、マウソリユース大王の墓、アレクサンドリア（アレキサンテリヤ）の大尖台、アンドロヒンカと名付くる像
184	カイロ城内の地形と様子
185	カイロの市に禽獣を売る所あり
186	地中海に海豚（仁魚）多し
187	仏・伊中間の河にある金沙と取り方

188	エジプト人の衣服および埋葬の様式
189	エジプト人の風俗と民族性
190	アレクサンドリア海辺の灯台とトルコに漂流した耶蘇教人の顛末
191	ペルシャ王の架けた大橋
巻七	
西域志	
192	エウハラツト河辺に瀝青（ペツキ）生ず
193	バビロンの塔について
194	ペグー（琶牛）国の四大堂と黄金の像
195	ペグー国は后のほかに三百余人の妃あり、王子は 90 人あり
196	ジャワ（爪哇）の隣島ビルマ（ビーマ）の女性上位
197	ムガール国の辺にあるバルラポレという所の婚姻風俗
198	カンバヤ（ガンハヤ）国の殺生を悪む風習
199	ベンガル（旁葛剌）国の辺にあるコウセという所の大耳を美とする風習
200	ベンガル国ポタントルという土地の耳の短き者を猿と名付けて賤しむ風習
201	椰子の樹（コツコスホーム）について
202	ムガール国の辺にあるバンナラスという所の埋葬形式と、ペグー国の白象および象を戦に用いること
203	ムガール国王の後宮 800 の妃あり
204	ジャワ島の辺にあるランバトという所よりダイヤモンド（キヤマン石）と黄金が生ず
205	ペグー国の裁判法
206	カンバヤ国の辺にあるカウルトという所の殺生を忌む風習と火葬
207	マルバール国内にあるコウシンの毒泉
208	ペルシャにあるエウハラツト河の水甚だ疾し
209	西域の人、臭気を防ぐため白檀の粉を塗る
210	ペルシャ海中のバーリン島は最上の真珠を産す
211	ガンジズ（カンヂス）河とその周辺の民族の風習
212	スペイン人、アメリカの原住民を捕え奴婢とす、心無き者は婦女を犯し梅毒（楊梅瘡）を患う
213	アメリカの鷹は羽毛最美にして甚だ美味なり
214	ペグー国のシンネルカントという地、虎多し
215	カルクフーンという鳥、極楽鳥、マニユツコスという小鳥、清水寺什物の鳳、五島の女島の鳥、ポルトガル王威勢最盛、ボルネオの樹木と葉
216	安永 8 年ロイアール舶来す

217	安永 9 年カイマンの子（鼈児）舶上す
218	安永 7 年喰火喰鳥舶来す
219	蕃国千里鏡の長きもの 200 余フート
220	一輛四馬の車、ペガサス（ペガシユス）、鷲と蛇の闘い、樵夫と獅子の逸話
221	墓所を荒らす獅子と墓守番（ヤンヲリツ）の話
222	騾（ラバ）について
223	様々な露の種類
224	アラビヤ国辺、駝糞を用い石炭に代う
225	西洋（蕃法）の学術の分類
226	針療は中国（唐土）・インドより西方になし、灸治はアジアの西、アラビア等の国に達す、ヨーロッパは用いず
227	ヨーロッパの種々の外科療法（大半欠）

特段留意したいのは項目47で、これは「万国管闚」諸本の中で唯一長崎本が有しているものである。神博本を確認すると、この項目が備わっていないことが判明した。また、長崎本のほか、岡大本、岐阜歴本、津A本、津B本、横市大Aに認められた項目190についても神博本には欠けている。

対して、長崎本に確認できない一方、全ての他本[6]が有している項目35については神博本にも備わっており、大半の本と同様に途中で分割されており、さらに文脈とはそぐわない小虫に関する記述が付されている。その他、長崎本以外の本に認められる項目としては、長崎本の項目162に該当する記述の後に配置されている文章で、アメリカで五十日移動すれば平原が広がり、そこには人家がなく、珍しい鳥や動物が多いという内容の文言が挙げられるが、これも神博本に備わっている。

続いて、項目の配列に関して述べると、長崎本以外で項目10、11を有している諸本では全てこれを項目17の後に配置しているが、神博本もその例に漏れない配列となっている。また、項目106についても、長崎本以外の大半の本が上巻（巻三）の終わりに配置しているが、神博本における位置も同じである。その他、項目212についても、長崎本以外の大半の本と同様に、神博本でも前後の項目との関連性が見出せない内容ながら項目215を分割した間に挿入されている。

続いて、項目の結合や分割について述べると、長崎本で明確に一つ書きにされている項目21と22、そして項目40と41が、長崎本以外の他本においてはそれぞれ一つの項目に結合されているが、神博本でも同様に一つにまとめられている。項目109と110は、カスピ海に触れると痺れる魚がいることと、カスピ海の水の苦さに言及した記事であるが、長崎本以外の大半の本でこれらが一つにまとめられており、さらに、魚の潜伏している場所を示す記述が付加されているが、神博本もかかる結合と記述の増補を備えている。

その他、項目179については、長崎本では改行が見られるものの一つの項目として記載されているが、神博本を含む全ての他本でこれらは二項目に分割されており、加えて、後半部分の冒頭、長崎本で「昔西洋人」とある記述が、他本では「フランシスキユステカライ」という具体的な人名を伴う形に変更されているが、神博本でも同様である。

ウ、記述の増減と脱字

記述の増補に関して一例を挙げると、項目4で五大州の説明が終わった後に、長崎本以外の他本では『坤輿外記』に関する注か文章が続いているが、神博本でも注が付され

ている。

反対に大きな欠文について述べると、項目68で長崎本では「ドルヘイン」の性質が良いことを述べた後に「土水火気ノ四行ヘーニツキヲ以火ニ配シトルヘインヲ以水ニ配ス」と伝統的な宇宙観に基づく文章が添えられているが、神博本を含む他本でこの一文が確認できるものは無い。加えて、項目225で長崎本が備えている「ゲシクトキキユンデ視学ト訳シテ遠鏡□(カ)功夫ノ起ル所ノ学ナリ」という文章が多くの本で脱落しているが、神博本でもこの部分が空白となっている。

もう少し小さい欠文で言えば、イギリス人が航海術に優れていることを説く項目15の締め括りの一文「暗危利亜是ニ答フ」が神博本を含む全ての他本で欠けている。さらに、項目69の末尾で剣魚の字義を説く記述、項目105で和書に基づいて半人半獣の人が韃靼国中に存在すると述べるくだり、或いは項目123で「タルホツト」という魚を「カレイノ如キカ」と推測する末尾、項目171末尾の「武侯祠山ノ神兵ノ如シ」などが長崎本以外では確認できないが、神博本もこれらの記述を備えていない。

一方、温帯について説明する項目9では、長崎本を除く全ての他本で寒帯について説くくだりが備わっているが、神博本もまたこの記述を有している。その他、アメリカの喰人国について説明した項目103などでも同様の現象が認められるが、神博本でも同じ記述の増補が認められる。

最後に、決定的な脱字を見ておきたいが、長崎本以外のいくつかの本で、項目148の文章中の「試金石」という言葉が脱落している。神博本で当該箇所を確認すると、この部分がやはり空白になっている。

エ、神博本の位置づけ

見てきたように、神博本は長崎本を除いて唯一前付で志筑序を備えていることで異彩を放ちつつ、長崎本以外の他本に認められる特徴をほとんど備えている一本であることが判明した。ただし、これらの特徴からただちに神博本の位置づけを探るのは早計である。

ここで留意しなければならないのは、神博本の序と本文では筆跡が異なることである。例えば、序と本文を比べると、前者は後者に比べて墨が濃く、字が小さく、丸い印象を受ける。そこで、頻出する「地」字を例に比較してみると、序における「地」字の土へんが三画目の横線をしっかり引いているのに対し、本文のそれは二画目の縦線から続けて跳ねるように記している。また、つくりである「也」に関しては、序では二画目と三画目の縦線の入りの高さが同じであるのに対し、本文では三画目の入りが必ず二画目より

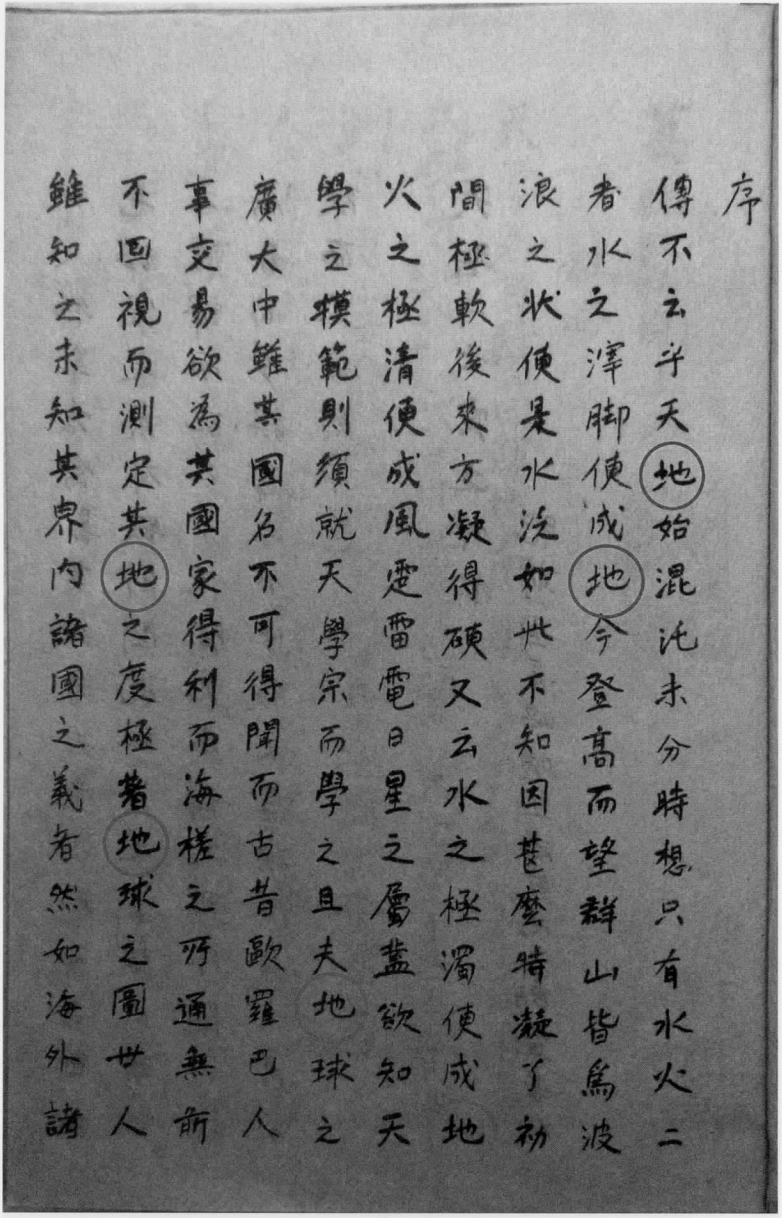
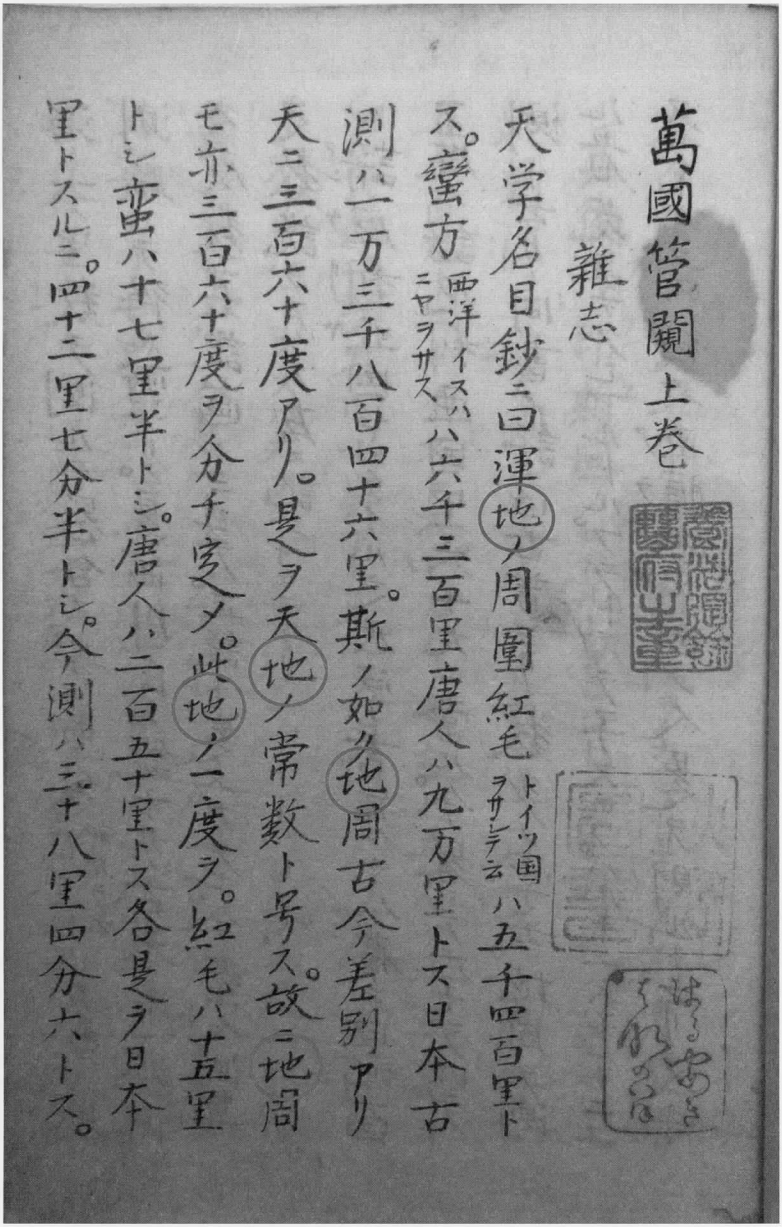

序
傳不云乎天地始混沌未分時想只有水火二
者水之滓脚便成地今登高而望群山皆爲波
浪之狀便是水泛如此不知因甚麼時凝了初
間極軟後來方凝得硬又云水之極濁便成地
火之極清便成風雷電日星之屬蓋欲知天
學之模範則須就天學宗而學之且夫地球之
廣大中雖其國名不可得聞而古昔歐羅巴人
事交易欲爲其國家得利而海程之所通無所
不周視而測定其地之度極著地球之圖世人
雖知之未知其界內諸國之義有然如海外諸

図１　「万国管闚」志筑序冒頭における「地」字
（神戸市立博物館蔵。なお、丸印は筆者による。以下同）


萬國管闚上卷

雜志

天学名目鈔ニ曰渾地ノ周圍紅毛トイツ国ヲサシテイヘリハ五千四百里トス。蠻方西洋イスパニヤヲサスハ六千三百里唐人ハ九万里トス日本古測ハ一万三千八百四十六里。斯ノ如ク地周古今差別アリ天ニ三百六十度アリ。是ヲ天地ノ常数ト号ス。故ニ地周モ亦三百六十度ヲ分チ之ヘ。此地ノ一度ヲ。紅毛ハ十五里トシ蛮ハ十七里半トシ。唐人ハ二百五十里トス各是ヲ日本里トスルニ。四十二里七分半トシ。今測ハ三十八里四分六トス。

図２　本文冒頭における「地」字（神戸市立博物館蔵）

低くなっているなど、序と本文で手が異なることは明らかである。

以上を勘案すると、神博本の底本は、そもそも志筑序を備えていなかった本文のみの写本であったと見ることが自然である。すなわち、長崎本以外の大半の諸本と同じように、神博本は転写過程で内容や記述が改変され、さらに序が脱落して伝わった一本であった。そして、どこかの段階での旧蔵者が、序が欠落した神博本の原型に、後から序を補記して一冊に綴じたものと考えられる。

おわりに

志筑忠雄序を前付に備える神博本「万国管闚」の内容構成を検討したところ、当該写本は、長崎本以外の諸本が有する項目や文章の増減などの特徴をほぼ備えた一本であることが判明した。よって、神博本は「万国管闚」原型から距離が離れた一本であり、従来通り長崎本が「万国管闚」原型に最も近い本と位置づけることができる。

神博本は長崎本以外の諸本に認められる特徴をほとんど有しながらも、長崎本を除いて唯一前付で志筑序を備えている珍しい本であるが、序と本文の筆跡が異なることを考慮に入れると、もともと神博本は長崎本以外の諸本と同じように志筑序が脱落した本であったと考えられ、その序が欠落した本に、旧蔵者の一人が序を後から補記したことにより、結果、かかる特徴を備えた一本になったものと見られる。

注

1　拙稿「志筑忠雄「万国管闚」の文献学的研究」（『雅俗』第一七号、二〇一八年）。なお、司馬江漢旧蔵本に遡る岡山大学附属図書館本と横浜市立大学学術情報センターA本は志筑序を後付に備えているが、ともに大幅な錯簡が認められ、原型から距離が遠い本と目される。

2　前掲拙稿「志筑忠雄「万国管闚」の文献学的研究」。

3　志筑の自筆稿本であると初めて言及したのは古賀十二郎。ただし、どこにも根拠は示されていない。古賀十二郎著、長崎学会編『長崎洋学史』上巻（長崎文献社、一九七六年）、三三八頁。前掲拙稿「志筑忠雄「万国管闚」の文献学的研究」では、長崎本が志筑自筆との結論には至っていない。

4　前掲拙稿「志筑忠雄「万国管闚」の文献学的研究」。

5　底本は長崎本を使用したが、破損により解読不能の個所は白四角で示した上で、岡山大学附属図書館本と横浜市立大学学術情報センターA本をもってルビで補っている。前掲拙稿「志筑忠雄「万国管闚」の文献学的研究」。

6　「全ての他本」というような表現においては、抄本などでそ

もそも項目を備えていない本については、特に必要の無い限りは言及しなかった。

【付記】写真掲載を許可くださった神戸市立博物館に御礼申し上げます。